

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

——二〇年後の検証——

大 木 啓 次

まえがき

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？ というこの表題をみて、なぜこんな論題をかかげるのか、不審に思う人も多いのではないかと思う。事実、ソ連邦に共産主義社会ができあがるができてまいが、われわれになんの關係もないと考える人も多いであろう。

だがしかし、もしほんとうにソ連社会が共産主義社会になっておれば、ソ連軍の外国侵略や外国駐留は絶対におこりえないことになるのだといえ、それだけでも、ただにポーランドをはじめとする東欧社会主義諸国のみならず、アジアの隣国・日本にとっても中国にとっても、多大の關係をもつことがわかるであろう。

もちろん、そのようなことだけではない。人類が未踏の共産主義社会の建設に成功したとするならば、それは、社会発展史のうえで、まさに世界的な、巨大な意義をもったできごとなのである。

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

ところがソ連邦では、もう二〇年以上まえのことであるが、一九六一年一〇月の共産党第二二回大会で、一九八〇年頃にはソ連社会が基本的には共産主義社会になるといふ輝かしい計画が、誇らかにうたいあげられていたのである。つまり、その共産党綱領にのべられている計画が実現していれば、もうそろそろ、ソ連社会は共産主義社会になってきているころなのである。

たしかに、一九六四年一〇月におこった、突然のフルシチョフ第一書記解任以後は、ソ連の党・政府機関や幹部がそれに関連することはまれとなっていたのではあるが、それにしても、第二二回党大会で採択された共産主義社会建設の党綱領は、今日にいたるもソ連共産党の現行綱領なのである。そして、一九八一年二月におこなわれたソ連共産党第二六回大会での報告で、ブレジネフ書記長は、「われわれは、現行の綱領に必要な変更と補足を加えるべきであろう」とはのべながらも、今だに「現在のソ連共産党綱領は、全体として、社会発展の法則性を正しく反映している」と評価しているのである。

なおつづくわえれば、ソ連共産党第二二回大会に出席した日本共産党代表団長・野坂参三中央委員会議長が、日本共産党を代表しておこなった「日本共産党中央委員会の祝辞」のなかには、つぎのようなくだりがある。

「わたくしは二二年まえソ連共産党第一八回大会に出席しました。その当時のソ連と今日のソ連、その当時の大会と今日のこの大会をくらべますとき、まったく隔世の感があります。当時ソ連では、社会主義の建設が中心任務であって、共産主義建設はまだ当面の問題にはなっていませんでした。しかし今回の大会は、それを具体的な日程にのべているのであります。(拍手)マルクス・エンゲルスが百年以上まえに天才的に展望した共産主義社会をこの地上に、現実に実現することをめざす歴史的な綱領を決定しようとしているのであります。ソ連における共産主義建設の勝利

をめざすこの綱領は、人類がこれまで経験したことのない真の自由と幸福をソビエト人民に保障するものであるとともに、全世界の勤労人民に大きなげましをあたえるものであります。(拍手)

「われわれは日本の進歩的勤労人民とともに、この共産主義社会の実現をめざすソ連の共産主義者と全人民のたまたかに心からの敬意を表するとともに、これをつよく支持するものであります。(拍手)そしてフルシチョフ同志を先頭とする中央委員会の周囲にかく団結したソ連共産党の全党員、全ソビエト人民の不屈の努力によってこの計画が必ず実現するであろうことを確信するものであります。(長くつづく拍手)」(『前衛』NO・一九一所載、傍点は引用者)

また、日本共産党代表団の一員としてソ連共産党第二二回大会に出席し、現在も日本共産党の最高幹部の一員として活躍中の榊利夫氏が、当時発表された論文「共産主義の壮大な展望——ソ連共産党第二二回大会と新綱領にみる——」(『前衛』NO・一九二所載)には、つぎのような文章がみられる。

「科学的共産主義の理論のしめした共産主義社会が、十月革命をやりとげたソ連邦においても、すでに目前に、つくりだされようとしている。ソ連共産党新綱領の二〇年の展望は、以上みてきたように、たいへん明快であり、率直である。それはソ連人民だけでなく、われわれ資本主義世界の勤労者にくめどもつきぬ確信と勇気をあたえてくれる。

「……いまわが国には、四四年まえのメンシェビキと同じような気分で、ソ連共産党綱領にたいして『批判』や『意見』をのべ、壮大な展望にケチをつけようとする高踏的な修正主義者や社会民主主義者がいる。だが、歴史と現実を照らしてみると、かれらの姿のなんとあわれなことか!

「共産党の言行が背離したことは、一度もない。ソ連人民はこの党の指導のもとに、壮大な前進をつづけている。その、目前の偉大な勝利にむかって。」(傍点は引用者)

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか?

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

四六

ソ連共産党の共産主義社会建設の綱領に対する日本共産党中央の態度は、まさにこれを絶賛し、その実現をまったく確信するものであったのである。

では、「日本共産党中央委員会の祝辞」の「確信」どおり、ソ連邦における共産主義社会建設の計画は実現したであろうか？ 榊利夫氏が言われるように、「共産党の言行が背離したことは一度もない」のだから、フルシチョフ第一書記が「言」ったとおり、そしてまた、それを支持して榊氏が「言」ったとおり、共産主義社会の建設が「行」われたであろうか？ 二〇年後の検証の結果、「歴史と現実とに照らしてみると」、あわれな姿をさらすのは誰であろうか。^①

(1) わが山本二三丸教授は「科学としての経済学」(『法経論集』、経済・経営篇I、愛知大学法経学会——に且下連載中。とくに(5)以降)において、戦後における日本共産党の路線のうつりかわりを、あるいはコミンフォルム機関紙掲載論文「日本の情勢について」や中国共産党機関紙『人民日報』社説「日本人民解放の道」(いずれも、一九五〇年一月)による批判との関係、あるいは、ソ連共産党第二〇回大会や第二二回大会との関係などもみながら、系統的にあとづけ、特徴づけをおこない、適確な論評を加えておられる。そのなかで、ソ連共産党綱領についても、また、それが日本共産党とその幹部に、どのよう^①うけとめられたかについても、鋭利な批判をくわえられている。参照されたい。

では、ソ連共産党の党綱領は計画どおり実現されているか？

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

—

ソ連共産党の現行綱領は、一九六一年一〇月に採択されたものであり、そのなかで「最初の一〇年間」といわれる

計画期間は一九六一——一九七〇年であるが、すでに党綱領よりも早く、第二回共産党大会は、一九五九——一九六五年・七カ年計画を決定しており、その計画期間は、綱領の計画期間と部分的に重複することになっている。そしてまた内容的にも、綱領の計画は七カ年計画をうけ、重複してつながつてもいるので、まずはその七カ年計画からみて行くことにしよう。

一九五九年二月のソ連共産党第二回大会において満場一致で承認された「一九五九——一九六五年、ソ連邦国民経済発展目標数字」は、高らかにつぎのように宣言している。

「七カ年計画完遂のあかつきには、ソ連は、人口一人あたりの工業生産高で、ヨーロッパのもっとも発達した資本主義国であるイギリスと西ドイツの現在の水準を上回り、ヨーロッパ第一位に進出するだろう。

「ソ連とアメリカの工業生産の増大テンポからみて、ソ連は、七カ年計画遂行の結果、いくつかの主要生産物の生産の絶対量で、アメリカの工業生産の現在の水準を上回り、他の品目についてはその水準にせまるだろう。この時期までに、もっとも重要な農産物の生産高は、総量においても、人口一人あたりでも、現在のアメリカの水準を上回るだろう。

「ソ連が生産の発展テンポでまざっていることからして、一九六五年からあと大体五年間で、アメリカの人口一人あたりの生産水準に追いつき、追いつくための現実的な基盤がづくりだされるだろう。このようにして、その時期までに、あるいはもっと早くなるかもしれないが、ソ連は、生産の絶対量でも、人口一人あたり生産高でも世界第一位に進出するだろう。とりもなおさず、そのことは、世界最高の生活水準を約束するものである。それは、資本主義と平和的競争で社会主義が世界的な勝利をおさめることを意味する。」(傍点は引用者)⁽²⁾

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

(2) 『一九五九——一九六五年、ソ連邦国民経済發展目標数字』、東京・ソビエト社会主義共和国連邦大使館、一九五九年。

七カ年計画が完遂されれば、人口一人あたりの工業生産高でヨーロッパ第一位となり、もっとも重要な農産物の生産高は、人口一人あたりでも、一九五九年当時のアメリカの水準を上まわり、さらにもう五年もたてば、つまり、一九七〇年頃にでもなれば、工業、農業あわせての人口一人あたり生産高で、ソ連はアメリカを追いぬぎ、世界第一位となるだろう。そしてそうなれば、当然、ソ連国民は世界最高の生活水準を享受できるようになるのだ。——七カ年計画の進軍ラッパは、このように高らかに、全世界にひびきわたったのである。

そしてこんどは、七カ年計画が採択された後約二年九カ月たった一九六一年一〇月に、ソ連共産党第二回大会で満場一致で採択された「ソビエト連邦共産党綱領」が、いっそう高らかに、つぎのように宣言しているのである。

「科学的共産主義の党としてのソ連邦共産党は、共産主義建設の課題を、そのための物質的・精神的前提の形成と成熟にしたがって提出し、これを解決しているが、それは、すでに到達した場所に足ぶみしたり、前進をおくらせてはならないのおなじように、必要な發展段階をとびこえるべきではないということ、を、たてまえとしているからである。共産主義建設の諸課題の解決は系統だった段階をおっておこなわれる。

「こんご一〇年間（一九六一年——一九七〇年）に、ソ連邦は共産主義の物質的・技術的基礎をつくりあげながら、人口一人あたりの生産高で、もっとも強大で豊かな資本主義国——アメリカ合衆国をうまわるであろう。勤労者の物質的福祉と文化・技術水準はいちじるしくたかまり、みんなが裕福にくらせるだけの物資を保障され、すべてのコルホーズとソフホーズはたかい生産性とたかい収入をもつ経営となり、設備のととのった住宅にたいするソビエト人民の欲求は基本的にみたされ、苦しい筋肉労働は姿をけし、ソ連邦は世界で労働日のもっとも短い国となるだろう

う。

「そのつぎの一〇年間（一九七一—一九八〇年）の結果として、共産主義の物質的・技術的基礎が創設され、全国民にありあまるほどの物質的・精神的財貨が保障されるだろう。ソビエト社会は、必要におうじてうけとる分配の原則が実現されるすぐ近くまで到達し、単一の全人民的所有への漸進的移行がおこなわれるだろう。このようにして、ソ連邦では基本的には共産主義社会が建設されるであろう。共産主義社会の完全な建設が終了するのは、それにつぐ時期である。……」

「こんご一〇年間に、工業生産高を約二倍半にふやし、アメリカ合衆国の工業水準をうまわる。」

「二〇年のあいだに、工業生産高をすくなくとも六倍にふやして、アメリカの現在の総工業生産高をはるか後方にひきはなす。」

「このためには、工業の労働生産性をむこう一〇年間に二倍以上に、二〇年間に四倍ないし四倍半にたかめなければならぬ。二〇年後には、ソビエト工業の労働生産性は、現在のアメリカの労働生産性の水準の約二倍になるが、一時間あたりの生産量は、ソ連における労働日の短縮と関連して、さらにずっと大はばに向上するだろう。」

「強大な工業とならんで、繁栄していく、全面的に発達した生産性の高い農業を建設することは、共産主義建設にどうしても必要な条件である。党は、農業生産力の強力な高揚を組織している。その高揚によって、たがいに密接に結びついた、つぎの二つの基本的課題が解決できる——それは、(1)ありあまるほど豊富な、国民のための良質な食料品と工業のための原料を確保し、(2)ソビエト農村を共産主義的な社会的関係へとしだいに移行させ、都市と農村の差異を基本的になくしてしまうことである。」

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

「農産物にたいする全人民と国民経済の需要をみたすために、農産物の総生産高を一〇年間に約二倍半に、二〇年間に三倍半に増大するという課題がたてられる。農産物の増加は、それにたいするますますたかまる需要をうわまわらなければならぬ。ソ連邦は、さいしょの一〇年間に、おもな農産物の人口一人あたり生産高で、アメリカ合衆国をおいこすだろう。

「ソ連共産党は、どの資本主義国にもまさる最高の生活水準をソ連邦で確保するという、世界史的意義をもった課題をうちだしている。」⁽³⁾（傍点は引用者）

(3) 『ソビエト連邦共産党綱領』東京・ソビエト社会主義共和国連邦大使館、一九六一年。

一九七〇年までに、工業においても、農業においても、人口一人あたり生産高で、ソ連はアメリカをおいこし、みんなが裕福にくらせるようになるだろう。この段階で、ソビエト人民が永年苦しみぬいてきた住宅問題も基本的に解決され、設備のととのった住宅がおおかたゆきわたるだろう。苦しい労働は姿を消すだろう。

一九八〇年ともなれば、さらに事態は進展し、生産力はアメリカをはるかにうわまわって増大する結果、全国民にありあまるほどの財貨が提供されるようになり、もうすこしで、必要におうじてうけとる分配の原則が実現されるようになり、人類の永年の夢だった共産主義が、現にソ連邦で、基本的には建設されるだろう。そうすれば、都市と農村との差異もなくなっていくのだ。新しい綱領は、断呼として、ソビエトのいまの世代の人びとは、共産主義社会でくらすことになるだろうと——それがほんとうのことならば——まさに世界史的意義をもった宣言をおこなうのである。

このソ連共産党第二二回大会で採択されたソビエト連邦共産党綱領は、ソ連共産党にとっての「第三の綱領」であ

り、「共産主義の全面的建設期」における「共産主義社会建設の綱領」とうたわれたものである。

「一九〇三年の第二回党大会で最初の綱領を採択したボリシエビキ党は、ツァール〔ロシア皇帝〕の専制政治を打倒し、ついでブルジョア制度を打倒してプロレタリアートの独裁を確立するためにたたかうよう、ロシアの労働者階級とすべての勤労者によびかけた。一九一七年二月、帝制がくつがえされた。一九一七年一〇月にはプロレタリア革命によって、人民にとって憎むべき資本主義制度が廃止された。歴史上はじめて社会主義の国が生まれた。あたらしい世界の建設がはじまった。

「党の第一の綱領は遂行された。

「一九一九年の第八回大会で第二の綱領を採択した党は、社会主義社会の建設という任務をかかげた。ソビエト国民は前人未踏の道をあゆみ、困難と窮乏にうちかかって、共産党の指導のもとに、レーニンがつくりあげた社会主義建設の計画を実現した。社会主義はソ連邦で完全に、そして最終的に勝利した。

「第二の党綱領もまた遂行された。

「ソビエト連邦共産党は、いまここに第三の綱領——共産主義社会建設の綱領を採択する。新綱領は、社会主義建設の実践を創造的に総括し、全世界の革命運動の経験をくみいれ、党の集団的思想を表現して、共産主義建設のおもな課題と基本的な段階を規定する。」⁽⁴⁾（傍点は引用者）

(4) 前出、『ソビエト連邦共産党綱領』

最初の綱領は、ツァールの専制政治とブルジョアの支配制度とを打倒し、プロレタリア独裁を確立するための綱領であった。最初の綱領が遂行された結果、ロシアに社会主義が生れた。

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

五二

第二の綱領は、社会主義建設のための綱領であった。ソ連国民が共産党の指導のもとに奮闘した結果、ソ連邦では、社会主義がすっかりできあがった。ソ連邦では、社会主義を、完全に、そして最終的に建設しおえたのだ。もう社会主義のところできずくずしてはならない。第二の党綱領も、ご用済みになったのだ。

さあ、いよいよ共産主義の建設だ。そのためには新しい綱領が必要だ。そこでいま、ここに、ソ連共産党第三番目の綱領——現実^にに共産主義社会を建設するための綱領——をもたなければならぬことになったのだ。

新綱領は、自らをこのように位置づけ、性格づける。

こうして、第二二回大会で、万場一致で採択されたソ連共産党の第三の綱領——報告者の名にちなんで、いわゆる、フルシチョフ綱領——が、今なお、ソ連共産党の現行綱領なのである。

二

ところで、すでに今日、一九五九——一九六五年の七カ年計画期間は完了し、さらにその後の五年間もすぎさってしまった。そしてまた、フルシチョフ綱領がバラ色の未来をえがくために見通しをたてた二〇年間もすぎさってしまっただのである。

もしかりに、「共産党の言行が背離したことは一度もない」ということで、このたびも「確信」とおりに「計画が必ず実現する」ということであつたならば、もうすでに一九七〇年頃以来、ソ連邦においては、工業においても農業においても、人口一人あたりの生産高が、アメリカをおいこして世界第一位となり、みんながなに不自由なく裕福にくらせるようになり、住宅問題も解決して、世界最高の生活水準が確保されているはずのところである。

そしてさらに一九八〇年頃ともなれば、さらにさらに生産はのび、アメリカなどはるか後方にひきはなして、もう比較することだって問題にならないくらいになり、食料品やその他の生活資料は、良質なものがあまるほど豊富になり、ソ連国民の世界最高の生活水準はますますゆるぎないものとなっているはずである。そして農村では、個人農園での私的生産などは姿をけし、社会関係は共産主義的なものになっており、都市と農村との差異はますますなくなってきたているはずである。こうして、一九八〇年頃のソ連邦では、基本的に共産主義社会が建設されおわっているはずなのである。

だがしかし、われわれはまだ、ソ連邦が人口一人あたりの工業および農業の生産高でアメリカをうまわって世界第一位になったということもきいていないし、ソ連邦ではみんなが世界最高の生活水準を享受しているともききおぼんでいないのである。いや、都合で多少おくれることになりはしたが、やはり計画どおりに右のような状態に近づきつつあるともきいていないのである。ましてや、基本的にせよ、ソ連邦で共産主義が建設されたというようなことは、どこからもつたわってこないものである。そして、そのかわりというわけではあるまいが、なんと！一九七九年一月には、ソ連軍のアフガニスタン侵略の報道が、衝動的に全世界を駆けめぐったのである。

ところがである。話は時間がさかのぼるけれど、一九六五年三月に開催されたソ連共産党第二三回大会でおこなわれ、「全面的に、完全に」承認されたブレジネフ第一書記の「党中央委員会の活動報告」によると、フルシチョフ綱領の路線は実行され、一九五九——一九六五年七カ年計画は完遂されたことになっているのである。

では、そのブレジネフ報告をみてみよう。

「わが党の第二二回大会から第二三回大会にいたる期間は、国内でも、国際生活でも、大きな、重要な出来事に満

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

五四

ちている。この期間を通じてソ連共産党は、第二〇回、第二一回、第二二回各大会で決定された路線を指針に、共産主義の建設に向つてソ連国民を一貫して指導してきた。党の活動全体は、ソ連共産党綱領の実行、共産主義の物質的・技術的基礎の創設、国民の物質的福祉の増進、社会関係の改善、高邁な共産主義的自覚にもとづくソ連人の教育に向けられた。……

「ソ連国内の発展という観点からすれば、それは、ソ連国民が共産党の指導の下に献身的な労働によって、七カ年計画を完遂した時期である。」

「党の掲げた課題、すなわち、人口一人当りの生産高で最も発展した資本主義諸国を追い越すという課題は、着実に達成されている。ソ連とアメリカの工業水準の差はますます縮ま⁽⁶⁾っている。」(傍点は引用者)

(5) この三つの党大会当時、ソ連共産党の最高指導者はフルシチョフ第一書記であつたから、それらの大会で決定された路線とは、つまり、いふなればフルシチョフ路線だつたのであり、いわばブレジネフ路線は、当初、基本的には——というより、一部をのぞいてほとんど——フルシチョフ路線を改訂することなくひきついたのである。だから、ブレジネフ路線は、一九五九——一九六五年・七カ年計画も、共産主義社会建設の党綱領もそっくりひきつぎ、フルシチョフ氏なきあとも、それらの完遂のために骨をおつたというしいのである。

(6) 『共産主義建設の新段階——ソ連共産党第二三回大会の記録』、刀江書院刊。

なお、右のブレジネフ報告中には、「七カ年計画を作成するに当つて、主観主義的な態度のためにいくらかの誤算が生じ、先走りしすぎたことを認めなければならぬ。ある部門では、予定された生産の拡張は、必ずしも実際の可能性に見合ったものではなかつた。」と、いくぐりみられる。これは、ひかえめな表現ながらも七カ年計画についての見通しの誤りと計画倒れを自己批判したものかといえ、そうではないようである。つまり、七カ年計画立案にあつたの誤りを、前任者フルシチョフ第一書記の「主観主義」のせいにし、あわせて、一九六四年一〇月におけるフルシチョフ解任を合理化しようとするものでもあるように見受けられるのである。

ごらんのように、ブレジネフ第一書記の報告によれば、七、八、九、十年計画は完遂され、一九七〇年になれば、工業、農業あわせての人口一人あたりの生産高で、アメリカを追いこすという、七、八、九、十年計画およびフルシチョフ綱領によつてかげられた課題が、着実に達成されて来ておる、ということである。したがつて、このブレジネフ報告がおこなわれた一九六六年三月の時点で、ソ連の人口一人あたりの工業生産高は、すでに西ドイツをも上まわつて、ヨーロッパ第一位となつており、以後それまでの調子をくずさずに行けば、もうあと四、五年もたたぬうちに、一九七〇年には、工業においても農業においても、人口一人あたりの生産高で、晴れて、アメリカを追いこして世界第一位となり、ソ連国民には、かねて念願の世界最高の生活水準が実現される、ということだったのである。

ほんとうだろうか？

三

それでは、以下、総論的ではなくもうすこし具体的に、いわば各論的に計画の達成ぐあいを検討してみることにしよう。

まず、住宅問題。

住宅問題は、フルシチョフ綱領における計画の総論部分においても、とくととりだされて、最初の一〇年間に「設備のととのつた住宅にたいするソビエト人民の欲求は基本的に満たされ」と言及されており、また、第二三回大会でのブレジネフ報告においても、「住宅問題は、最大の社会問題の一つである」、とのべられているのであるが、その住宅問題は、七、八、九、十年計画やフルシチョフ綱領において、どのようなあつかいをうけ、そして、どのように実現されて

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

きているのであろうか。

一九五九—一九六五年・七カ年計画では、住宅問題についてつぎのように約束されていたのであった。

「共産党およびソビエト政府は、全国的な意義を有する住宅建設をいっそう発展させることが、現在では、党、ソビエト、労働組合、経営等のすべての機関の、すべてのソビエト国民の、もっとも重要な課題の一つであるとみなしている。

「国内における住宅不足の一掃を目的とした住宅建設の発展にかんするソ連共産党中央委員会および閣僚会議の決定において提起されている諸課題は、現在、成功のうちに実現されつつある。それは時機をうしなわないうちに、必ず完全に遂行されるであらう。……」

「都市および労働者町における住宅施設は、七カ年計画の終りには、一・六倍に増大するであらう。都市および農村では、家族が住むに適した、経済的で設備のととのった住宅が建設されることにならう。アパートの居住面積を配分するにあたっては、家族にそれぞれ一戸ずつの個別住宅を提供するやり方「同居をなくす」を実現するという課題が提起される。(7) (傍点は引用者)

(7) 前出、『一九五九—一九六五年、ソ連邦国民経済発展目標数字』

すなわち、住宅不足の一掃という課題は、おそすぎることがないように、必ず、完全に果されるであらう。

一九六五年までの七カ年計画が完遂されれば、都市でも農村でも、一戸に何家族も同居するというような事態は解消され、それぞれの家族にそれぞれ一戸ずつの、家族が住まうに適した、経済的で設備のととのった個別住宅が提供されるだろう——こういうことが七カ年計画では、住宅問題について約束されていたのである。

ごらんのように、七カ年計画のかかげた住宅問題についての課題は、共産党・党官僚トップの言としてはまことにめずらしいほど、たいへん具体的であって、後になっての言いのがれやごまかしのできにくいものでもあったのである。

つぎに、フルシチョフ綱領では、住宅問題について、どのような公約をしていたのであろうか。

「ソ連共産党は、住宅問題という、ソビエト国民の福祉向上にとつても、つとも切実な問題を解決する課題をたてている。最初の一〇年間（一九六一—一九七〇年）には、国内の住宅不足に終止符がうたれる。まだ狭い住宅や設備のよくない住宅にすんでいる世帯は、あたらしい住宅にはいるようになる。後半の一〇年間（一九七一—一九八〇年）の結果として、新婚者の世帯もふくめてすべての世帯が、衛生および文化生活的諸要求にこたえる完備した住宅をもつようになる。旧式の農家は基本的にはあたらしい近代家屋によってかえられるか、あるいは再建の可能性があると
ころでは、必要な改善をほどこして建てなおされる。後半の一〇年間には、すべての市民の住宅の使用は、しだいに無料となっていく。」（傍点は引用者）

（8） 前出『ソビエト連邦共産党綱領』

すなわち、一九七〇年までには、住宅不足は解消され、狭すぎる住宅とか、設備不良の住宅とかに住んでいる世帯は新しい住宅にかわれるようになるだろう。そして、一九八〇年までには、すべての世帯が、衛生的にも文化的にも、現代の要求にこたえうる設備の完備した住宅をもつようになるだろう。また、すべての市民の住宅は、無料で使用できるようになるだろう——こういうことが、党綱領では、住宅問題について約束されていたのである。

四

それでは、プレジネフ第一書記の報告にあるように、党綱領が実行され、七カ年計画も完遂された結果、ソ連の住宅事情はどのようになったであろうか。実地での見聞にもとづく証言を、手近なところでさがしてみよう。

鈴木俊子著『誰も書かなかったソ連』（サンケイ出版刊）には、つぎのように書かれている。

「作家同盟機関紙の『文学新聞』が一流建築家による前衛的な一般住宅を写真入りで紹介したところ、反響がものすごかった。ある投書には、私たちが家族四人は最近やっと二三平方メートルの大部屋を隣人と半分に分け合っただけで、自分たちのものとして住むことができるようになった。間仕切り部屋で、トイレ、台所、風呂のいわゆる諸設備こそないけれど、やっと家族だけの安住を得た」と切実な住宅事情を訴え、部屋をすでに持ち、みちたりしている人たちが基本にして、住宅政策をたててはならない。前衛的な奇抜なアイデアの住宅も結構だが、まず雑居生活からの解放を望み、たとえ一部屋でも、戸別アパートに住みたいと夢みている幾百万の人々を対象にすべきだ」と結んでいる。

「……モスクワの旧市内では、住宅事情が深刻で、四、五家族が台所、トイレ共用のところが多く……」

「私の知り合ったソ連人で、住宅事情の悩みをいわない人はごくまれだった。……」

「姑が隣室にがんばっていて、自分達が一部屋で窮屈に暮らしているため、赤ん坊を持つまいとしていた若夫婦。隣人とそりが合わず、共同台所でけんかが絶えないのを苦にして、休日や祝祭日を一般の人とずらしてとっていただいたおばさん。部屋がせまいので、休日は雨が降っても雪が降っても外出して、うさを晴らしていた中年夫婦……」

「モスクワの中心部では、たいていの人々が日本でいう3DKの戸別アパートを、三世帯で分けて住むという暮ら

し方だ。当然、台所、トイレ、風呂場の諸設備は共同使用……

「共働きで、ただでさえ気ぜわしい夕食時にも、共同台所は勝手に使用できない。順番をきめ、その日ずっと後にまわった家族は、せまい一部屋にこもっていても仕方がないので、健康のためにもと散歩にでかける。冷たい冬の夜八時、九時に、防寒具に身を固め、小さい子供の手を引いて散歩している夫婦をよくみかけたものだ。

「ごたぶんにもれず、このような暮らしをしているある主婦に、家事のうちでなにがいちばんたいへんかと聞いたところ、『洗濯』という答えが即座にはねかえってきた。よくわけを聞いてみると、この主婦のアパートには風呂場がなく、洗濯機はおくところがありません。すべて手仕事。たとえ風呂場があっても、共同使用で各自が洗濯機をおけるスペースがないから、洗濯機を持たない人が案外多い。

「かの主婦のところは、水道の蛇口といったら台所に一つあるだけ。それも四家族用なのだから、洗面も炊事も洗濯もこれ一つでやる。大きい洗濯物は大きいトタンのバケツに水をはり、洗濯物と洗剤を入れて、グツグツ煮洗いしてから、そのせまい流しですすぐ。干し場は、天井の高い台所の空間に綱をはりめぐらして干すのだという。これではたしかに気の重くなる家事労働だろう。

「統計によると、一九六八年のモスクワ市民の平均居住面積は七平方メートルで、生活様式上、ベッドをおくことを考えると、たいへん窮屈な住まいということになる。このせまさか人工中絶手術の大きな原因になっているというデータもある。

「多くの場合、このせまさか、台所、トイレ、浴室の三、四家族共有の雑居生活とつながっているのだから、働く婦人には不便で、家事の処理がいつそうやりにくくなっている。さらに消費物資の不足と店での行列が働く主婦に追

い討ちをかけているのだ。」

著者のモスクワ滞在は一九六六——一九六九年の期間、すなわち、七カ年計画期間終了直後につづく期間であり、その見聞にもとづくものであるとのこと。

さらに証言をもとめよう。吉成久子著『モスクワでは、いま』（蒼洋社刊）にもつぎのようにのべられている。

「モスクワ市内にある古いアパートでは、庶民たちは、現在でもひとつのドアの中に二世帯、三世帯が同居しています。バス、トイレ、台所は共通で、お互いに交替で使っています。壁のすぐ向う側には赤の他人が住んでいるという住宅事情、時には離婚した夫婦が、部屋がないため、憎み合いながら同じ部屋で暮らしている例もあります。そして他方には、別荘を与えられ、別世界で生活を楽しんでいる特権階級がいるのです。」

著者のモスクワ滞在は一九七三——一九七七年の期間、すなわち、七カ年計画終了後すでに五カ年以上経過した期間であり、フルシチョフ綱領のいう、後半の一〇年間に含まれる期間である。

どうやら、話はいぶちがっているようである。

クレムリンのおひざもとであるモスクワの中心部で、七カ年計画期間終了後においても、アパートの一戸内の各居室ごとにそれぞれ一家族がおしこめられて、数家族が一戸内に同居し、台所、トイレ、風呂場は共同使用という人々が多い——庶民たちは、たいていそうだ、ということなのである。

台所にある一個の水道蛇口で、四家族もが——それが四家族でなく二家族であっても——洗面も、炊事も、洗濯もやるところさえあるということは、たとえそれが稀な事例であったとしても、それほどの事例がまちがいに存在しているということは、七カ年計画や党綱領の約束と、あまりにもかけはなれた実態ではなからうか。すなわち、七カ

年計画やフルシチョフ綱領によれば、一九六五年までには、一戸に何家族もが同居するというような、何家族もの雑居住宅はなくなつて、それぞれの家族にはそれぞれ一戸ずつの、設備のととのつた個別住宅が提供されるはずではなかつたか!? 七カ年計画や党綱領での約束などは、しよせん、共産党官僚の画いた餅にすぎなかつたのであろうか。住宅問題についての党と政府の約束が実行とあまりにもへだたつてゐることは、とても羊頭狗肉どころではあるまい。

こんどは、一九七一年から三年間、ニューヨーク・タイムスのモスクワ支局長として報道の任にあつたヘドリック・スミス氏にたずねてみよう。

「住宅こそソビエトの消費者の喜びと悲しみの奇妙に入りまじつた感情を如実に示すものである。」

「自分たちの新しいアパートを自慢する学者、技師、労働者、教師に、ほとんどいたるところで出会つた。彼らのアパートは西欧の水準からすると地味なものかもしれないが、以前共同アパートに詰めこまれ、台所、浴室、トイレを四ないし六家族で共用していた人たちには、人生の新たな展望を与える程度には明るくかつ優美である。……」

「それでも住宅不足が大量で深刻であるため、ガートルード・シュレーダーのような西側の経済学者は、いまなおソビエトはヨーロッパの主要国のうちでもっとも住宅の不足している国の一つであり、ソビエト政府の健康と人並みの生活の最低水準に照らしても不足しているとみている。ソビエトの『衛生的な住宅基準は一九二〇年に一人当たり居住スペース最低九平方メートル』と定められた。だが半世紀たつて、ソビエトの住宅問題についてのアメリカの専門家ヘンリー・モートンは、『都市地域のソビエト国民の大多数は一九二〇年の最低水準に達していない』ことを発見した。

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか?

「彼らの四分の一以上がいまだに共同アパートに住んでいるとソビエトの当局者は認めるが、西側専門家は、この数字は三分の一に近いとみている。一九七二年に、ソビエトの都市部の一人当たりの居住スペースは全国平均で七・六平方メートルで、これはアメリカの都市生活者の居住スペースのおよそ三分の一、西ヨーロッパの都市生活者の二分の一だった。さらにソビエト国内では、モスクワやリガ、タリンといったバルト海沿岸の共和国の首都は、中央アジアやコーカサスのタシケント、エレバン、ドウシャンベといった開発の遅れた都市よりも暮らし向きがよい。

「ソビエトの人口統計学者たちは、ソビエトの都市部の家族の規模が小さい——ふつう一家に子供一人——のは、住宅難のせいだとしている。

「住宅事情はいろいろな面で一九七〇年代なかばのソビエトの消費生活の典型となっている。生活水準は目に見えて向上しているが、依然、西欧、とくにロシア人が比較したがるアメリカの水準とはかけはなれている。」⁽⁹⁾

(9) ヘドリック・スミス著、高田正純訳『ロシア人』上、下、時事通信社刊。

本書は、丹念にあつめられた膨大な資料の肌理こまかな観察にもとづき、現代ソ連邦のさまざまな人達のそれぞれの生き方が、哀歓をこめて、実に生き生きと描かれていて興味ぶかい。

同居をなくして家族ごとに個別住宅を提供するとうたいあげた七カ年計画が——ブレジネフ第一書記によれば——完遂されたといわれるのに、事實は、首都モスクワをはじめとする都市住民大衆の四分の一から三分の一が依然として一戸のなかの大家族同居という状態におかれている。住宅不足は時機を失せず完全に一掃されるはずが今なお一掃されず、住宅不足に終止符がうたれることは決してなかったのである。

もっとも、第二三回大会でのブレジネフ報告には、つぎのようなどころも含まれている。

「われわれは住宅をたくさん建てているが、それでも住宅問題は、まだ最も差し迫った問題として残っている。党は、この問題の解決を特に重視し、住宅建設のための資金をふやし、建設工業の基盤を上げ、住居の質を改善しなければならぬと考えている。……」

ブレジネフ氏は「住宅問題はまだ最も差し迫った問題として残っている」というけれど、これでは、住宅問題がどういう意味で最も差し迫っているのかということが不明にされたままである。つまり、解決をせまられている問題が具体的に説明されず、ボカされ、ごまかされているのである。いかにも党官僚らしい作文の一例なのであろうか。ともかく、七カ年計画やフルシチョフ綱領で住宅問題についてかかげられた課題は、はるかかなたにおき忘れられたままであり、共産主義社会建設の一環としての住宅問題の解決はおろか、社会主義にふさわしい一般国民のための住宅条件の確保すら、あたかも百年河清を待つかのような状態なのである。

五

ところで、アパートの一戸に何家族もが同居しているという庶民たちの住宅難をよそに、「他方には、別荘を与えられ、別世界で生活を楽んでいる特権階級がいるのです」と、吉成久子さんはいわれていたが、党・政府の高官たちはどんな住いかたをしているのであろうか。ちょっとのぞいてみよう。

「ブレジネフ書記長とアンドロポフ国家保安委員会議長は、クトゥーゾフスキー通りのアパートに住んでいます。クレムリンのトップの人たちがアパートぐらしというところ、さすがは社会主義国だという錯覚をもちそうですが、実際には、名前のついていない特別のビルの四階とか五階を独占して、新貴族らしい暮らしぶりのようです。」⁽¹⁰⁾

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

六四

(10) 前出、『モスクワでは、いま』

「都市のもっとも美しい地域では、中央委員会、党州委員会および党市委員会、閣僚会議の、第一級の家の数がますます増加している。これらの家は、特に遠方からの旅行者に対して、ソビエトの労働者のための新しい家として案内される。

「ノーマンクラツラ（現存社会主義国家を支配する党官僚たち——引用者）用の家は、独自の建築監督によって建設される。それは急いで建てられる規格化された建物ではなく、音のしないエレベーター、心地良い階段、そして広い居住部分をそなえた堅固で美しい建物である。モスクワでは、こうした住宅群はクトゥワゾフ通りやクンツェヴォ地区で見出すことができる。そうした家はまた、首都の中心部の静かな通りに、他の家々の間にはさまれ、ばらばらに立っている。例えばグラノフ通りのクレムリンレストランの向いにある有名なビルや、あるいは、スタニスラフ通りの新しいビルがそうである。

「勝利した共産主義者が、労働者を地下室から金持の住宅に転居させた時代は、過ぎ去ってしまった。現存社会主義国においては、再び貴族の館や貴族の住宅地域がある。そして特に審査をうけた労働者が、支配者の住宅で修理作業を行うためにのみ、そこに入ることを許される。

「これらの住宅は大きい。時に最大八室もあることがある。特に大物のノーマンクラツリストは、ある階全部を手に入れる。そこでは二つの並びあった住宅が互いに結びつけられている。⁽¹¹⁾」

(11) ミハイル・S・ヴォスレンスキー著、佐久間穆・船戸満之訳『ノーマンクラツラ——ソヴィエトの赤い貴族——』、中央公論社刊。

ノーマンクラツラとは、「訳者あとがき」によれば、「簡単にいうと、ソヴェエトなど現存社会主義国家の各級党機関の権限を精密に規定したりストのことなのである。だが、その意味するところは、単にそのリストにとどまらない。このリストに記載された職務についている党员エリートの集合体を指している。この集合体が、現存社会主義国家を管理し、支配しているのである。」

本書は、かつてノーマンクラツラの一員でもあって、ソ連共産党・党官僚世界の内部事情に詳しい著者が、その豊富な知識と見聞を駆使して、いわゆるノーマンクラツラ体制の実態を内部告発した、異色の、まことに興味ある書物である。

ノーマンクラツラは、クレムリンから村落にいたるまでの肝要なおさえどころにくまなく配置されているが、著者は、ソビエトのノーマンクラツラを、総黨員数約一七〇〇万人の約四％にあたる、約七〇万人と推計している。

ソ連の党や政府の高官たち、また、彼らとなんらか利害関係を共にする人たちはむしろ語らないのであるが、秘密のペールから見えかくれする彼らの生活ぶりについての多くの証言は符合する。党・政府の高官をはじめとする、特権をほしいままにする連中には、先刻、住宅難はない。一般民衆の住宅事情は、まだ前近代的といつてよいくらいであるのに、党官僚たちの住宅は、もう共産主義社会の住宅——というよりも、党貴族の御殿——なのである。党官僚たちにとって共通の一つの心配は、彼らの生活ぶりを民衆から、いかに巧みにかくすかということである。

「しかしながら、地位の高さを示すもつとも大きな特権はモスクワの郊外にある。指導者とその家族たちは隠れ家のような別荘ダチヤのある地域全体を持っている。この一つ一つだけでも、リチャード・ニクソンのバームビーチャヤカリフオルニアの豪華な別邸をしのぐかもしれない。……

「党の指導者は数エーカーの土地のついたマンション（大邸宅）を持っているが、これは国から無料で手に入れる。彼らの住宅は高い緑の柵で囲まれている。あるモスクワ市民の話によると、一般のロシア人は子供の頃からここにはあまり近寄らぬよう教え込まれているという。その多くは、外国大使館がモスクワ河畔に持っている共同ビーチ

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

のあるウスペンスコエ村へ向う道からほんの少し離れたところにある。」⁽¹²⁾

(12) 前出、『ロシア人』

「およそソ連の道路はこんなもの、五十歩、百歩とあきらめていましたので、はじめてウスペンスコエ街道を走った時は、家中四人とも眼をみはりました。

「このあたりの道は路肩に夜光塗料を塗った白い杭が、同じ間隔でうちこまれています。舗装道路もなめらかで、実に立派です。ただ交通整理の警官の姿がやけに多く目につきます。……

「この街道から森のほうへ入っていく道路の入口には、ところどころ進入禁止の標識が目につきます。そしてその近くには必ず警官が立っています。これはその奥に、党幹部の別荘が建っているということです。その規模や所有者名などはいっさいわかりません。時々その道路から「ジル」やメルセデス・ベンツ六〇〇が飛び出してくると、その別荘は政治局員の別荘らしいと判断します。「チャイカ」の出入りがあれば党中央委員の別荘のようだ、といった具合です。

「亡くなったミコヤン元政治局員の別荘は、このウスペンスコエ街道に沿って建てられており、赤煉瓦づくりの豪華な邸宅が、走行中の車からもよく見えます。どの別荘も森の奥深く、一般の庶民の眼にふれないような所に建てられていますので、ミコヤン氏の別荘は唯一の例外といえるでしょう。」⁽¹³⁾

(13) 前出、『モスクワでは、いま』

党・政府高官達の別荘周辺は、道路の整備ぶりからしてちがうようである。

都市のなかでも静かで美しい地域に建てられた特別仕様の立派な建物。そのなかの設備がととのった広く快適な住

宅。郊外の森の中にひそむ豪華な別荘。国費でかかえられた家事使用人たちもかしづいている。

党・政府高官たちはこうしたところに住み、彼らだけの親密な世界をつくりあげているのである。

もう、なんと評したらよいのだろうか！

七カ年計画や党綱領でさだめられた課題が実現されないために、多くの一般の労働者や農民が、一戸内に数家族同居という住宅難から今なおのがれられないときに、むしろその公約不履行に重大な責任すら負わなければならぬ党・政府高官たちが、庶民の目をさけて、自分たちだけでこうした生活を楽しむということは、彼らが、労働者、農民をどうまんに見下す、労働者、農民とは精神的にも敵対的な別世界に住む特権者達であるということではないであらうか。

それにしても、ノーメンクラトゥラに対比して、なんともあわれなのは一般の労働者や農民たちである。

同居の解消！

家族には、それぞれ家族ごとの、経済的で設備のととのった個別住宅を！

こよびかけ、約束してくれた七カ年計画。

一戸内の各部屋に一家族ずつ。大部屋——といっても、二三平方メートルの部屋も大部屋なのだ——は間仕切りして二家族に。一戸に数家族が同居し、なかには水道の蛇口一つで数家族が洗面から炊事、洗濯までしなければならぬ人達もいる幾百万もの、あるいはもつと数多くの庶民たちにとって、七カ年計画や党綱領のうたいあげた目標の住宅は、どんなにか待ちこがれた夢であつたらう！

ところがその夢は、実現されることなく、文字どおりはかない夢と消えさってしまったのである。

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

六

計画だおれ、公約違反は住宅問題だけではない。

七カ年計画が完了してさらに五カ年ほどたった一九七〇年頃には、ソ連邦は、工業においても農業においても、人口一人あたりの生産高でアメリカをおいこして世界第一位となり、ソ連国民には世界最高の生活水準が約束されていたのであり、さらに一九八〇年頃ともなれば、ありあまるほどの豊富な良質の食料品が提供されるはずだったのである。

ところがなんとまた、一九七〇年代のはじめ以降、ソ連邦は、従来の穀物輸出国から、ほぼ経常的な大量穀物輸入国に転落する羽目にたちいたったのである。

そしてなお、一九八一年二月になっても、ソ連共産党第二六回大会の演壇から、ブレジネフ書記長はつぎのようにのべなければならなかったのである。

「言うまでもないことだが、勤労者の生活水準向上は、貨幣所得の増大に限られるものではない。ソ連共産党中央委員会が考えているように、現在、食料品、ならびに日用品の供給改善の課題がきわめて緊要なものとなった。

「ここ数次の五カ年計画で食料生産は増大したが、同時に、各共和国、各州における事情に詳しい党中央委員会と中央委員会書記局は、住民への食料供給の面で困難がいまだにあることを認めている。これと関連して、国内資源の動員と外国貿易による対策がとられてきたし、今もとられている。

「問題の抜本的解決を図るためには、特別な食料計画を作る必要があるとみなされた。それは、農産物のいちじる

しい増産を保障すべき計画で、農業とその生産物の貯蔵、加工に従事する部門の密着を図ることである。そしてもちろん、商業とも密着しなければならない。言葉を換えて言えば、住民にたいする食料供給を間断なくおこなう課題をできるかぎり短期間に解決するのがこの計画の目的である。計画作成作業は始ったばかりであるが……」

「特別な食料計画」の「第一の課題は、とりわけ不足しがちな農産物の生産を高めることである。私がいうのは、何よりも、食肉とその他の畜産品のことである。」⁽¹⁴⁾（傍点は引用者）

(14) 『ソ連共産党第二六回大会へのブレジネフ書記長の報告』、ノーボスチ通信社、一九八一年。

「住民にたいする食料供給を間断なくおこなう」ということは、いまだに実行されていない。住民にたいする食料供給は、とぎれとぎれである。歴大な量の食料輸入にもかかわらず、「住民への食料供給の面で困難がいまだにあることを認め」なければならぬ。もはや小手先の対策できりぬけられるような状態ではない。「問題の抜本的対策を図」らなければならぬような状況なのである。したがってそのためには、並たいていのことではなく、「特別な食料計画を作る必要がある」のだ。ぐずぐずしているわけにはいかない。しかし、「計画作成作業は始まったばかりである」——ブレジネフ書記長がのべていることは、まあこんなことになるのだろうか。

冗談ではない！ 七カ年計画は完遂され、人口一人あたりの生産高でアメリカをおいこして世界第一位になるといふ課題が着実に達成されていると誇ったのは、どこの誰であったのだろうか!? 一九六五年三月のブレジネフ氏自身ではなかったか。

いったいぜんたい、どうなっているのだろうか？

どうも、ノーメンクラトゥラの言うことには信用がおけないようだから、ソ連の食料事情はどんな様子であるの

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

か、こんどもまた実地での見聞にもとづく証言をもとめてみることにしよう。

それではまず、国营商店の八百屋をのぞいてしらべてみよう。

「八百屋には一年を通じてあるのは、ジャガイモ、ニンジン、ネギくらい。あとは干しくだもの、ビン詰め類。夏場にはこれにキャベツ、キュウリ、トマト、ピーマン、ピーツ（赤かぶ）、青ネギが色どりをそえる。もちろん、くだものも、イチゴ、メロン、リンゴ、ナシ、スイカ、スモモ、アンズ、ブドウ、サクランボ、レモン、バナナまで売られるが、リンゴを除いてはごく短期間に少量売られるだけだ。」

そのリンゴにしても、「国营商店の八百屋で売られているリンゴといったら、赤ちゃんの握りこぶし大で、それも傷だらけ。よくもこう傷ものばかりを集めたものだと感じたものだが、それもそのはず、トラックの荷台にじかに積んでホロもかぶせずに町に運び込み、スコップで荷おろしするのだから、たまったものではない。⁽¹⁵⁾」

(15) 前出、『誰も書かなかったソ連』

「じゃがいも、キャベツ、玉ねぎはいつでもあるといいながらも、厳冬の一時期には姿を消してしまうこともあり⁽¹⁶⁾ます。」

(16) 前出、『モスクワでは、いま』

つぎに、国营商店の肉屋をみてみよう。

「肉屋はヒツジ、牛、豚、トリ……と種類は日本と同じようだが、骨も皮もついた塊のままではか売らない。ヒツジも牛も、どういうわけか肉の色が黒ずんでおり、食欲をそそるものではない。」

「トリは極端に不足していて、めったに売り出されず、売り出されるとたいへんな行列になってしまう。……」

「ハムやソーセージも売られている。主としてソーセージで、ハムはめったに店頭に見われず、あれば大行列になつてしまふ。」⁽¹⁷⁾

(17) 前出、『誰も書かなかったソ連』

これはひどい！ 約束されたありあまるほど豊富な良質の食料のかわりに、品質も低劣で欠乏しがちな食料品、そしてあいもかわらぬ買物行列。

このような、品目もそろわず、品質も劣悪な野菜と食肉でもって、いったい、どのようにして世界最高の生活水準にふさわしい食事を演出できるというのであろうか。

おそらくは、こうした状態が今日もなお存続し、さすがのノーメンクラトゥラも、これをそのままにしておくことはできないと認めざるをえなかったのであろう。これでは「住民への食料供給の面で困難がいまだにあることを認め」なければならぬだろうし、「住民にたいする食料供給を間断なくおこなう課題を、できるだけ短期間に解決する」必要もとなえなければならぬであらう。

七

ではこんどは、いわゆるコルホーズ市場（自由市場）をみてみよう。

「ここには国营商店には見られない活気があって、売り手は客に声をかけて少しでも多く売ろうとつとめるし、買手は方々をまわって、少しでも安く質の良い品物を買おうとする。ここにだけ、商品売買の本来の姿とサービスが残されている感じだ。野菜、くだものから花に至るまでバザールの品は高価だが、国营商店とは比べものにならない

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

ほど品質がよい。同じコルホーズ員が広い共同のコルホーズの畑で働くときの、農作物に対する気配りと、せまい自
分個人の庭先（〇・二五〜〇・五ヘクタール）でつくる作物に対する気配りの相違がでているとしか思わないわけに
はいかない。国営商店では、あんなに手荒く扱われていたリングゴが、バザールでは形からして見事な大きさで、つや
つやと一個一個みがかれて大切に並べられている。町の店にはめつたにないトリが、いついってもあるし、牛、ヒツ
ジの肉は、結構色つやがよく、大理石の売り台に、切り分けられて並べられている。⁽¹⁸⁾

(18) 前出、『誰も書かなかったソ連』

これはこれは、国営商店とくらべると、まるで別の国へ行つたようである。しかし、もしソ連の住民大衆がこのよ
うなコルホーズ市場で、充分に品質のよい食肉を入手できるようであつたなら、ブレジネフ書記長も第二六回党大会
の壇上でまで、「特別な食料計画」の「第一の課題は、とりわけ不足しがちな農産物の生産を高めることである。私
が言うのは、何よりも、食肉とその他の畜産品のことである」などと言う必要はなかつたわけである。

ヘドリック・スミス記者はつぎのように書いている。

「農民たちは、自分たちのささやかな菜園からとれた野菜や、屠殺した仔牛、ニワトリ、ウサギなど、何十億ルー
ブル相当の『商品』を合法的にこの自由市場に持ち込み、ソビエト経済全体からみれば、はなはだ異色な『ハイ、い
らっしゃい』の呼び込みよろしく、売りさばくことができる。

「われわれ外国人にとって、この農民市場はまさに天の賜物だったが、これは多くのロシア人家庭の場合も同様だ
った。もつとも値段のほうは、ウォルドルフ・アストリア・ホテルのルーム・サービス並に、目の飛び出るようにな
ることがあり、主婦はよく財布をのぞきこむのだった。たとえば夏場一ポンドあたり三〇セントだったレタスが、一

一月には一ドル五〇セント。冬になると、カリフラワー一個が二ドル五〇セント。南ウクライナ産の甘梨が一個五〇セント近くする。グルジア産のバラは、一月になると一本一ドル三五セント。しかし、品質はよく、品数も国営商店に比べると、はるかに豊富である。しかも、ソビエトの主婦にとって、商人たちの愛想のいいお世辞や、呼び込みの声には、抵抗しがたいものがある。目の前には、熟れた甘酸っぱい匂いを発する商品がずらり。主婦たちにとって、これはいいけど、ちょっと値段が高いわ”と、財布と相談をするときの、あのスリルがなんともいえない。……

個人農園は、「いずれも小規模で、ほとんどが片手間に耕作されている。しかし、チリも積ればのたとえどおり、その総生産高は龐大なもので、これはソビエト経済に不可欠の存在である。二億五〇〇〇万のソビエト国民の食生活は、これなくしてまかないきれない。ソビエトはイデオロギーのうえからいっても、この点をつかれるとお手あげである。したがって、ソビエト政府は、これら個人労働（私的労働——引用者）による部分が表面化することを極度に嫌う。そのかわり、”社会主義農業の英雄的業績”を大々的に吹聴することを好む。しかし、一九七五年三月に出た、むしろ例外的な記事によれば、年間三二五億ドルにのぼる農業総生産高の二七パーセントが個人経営の農場によることが明らかになっている。ちなみに、これらの農場の占める割合は、ソビエトの全農地（約二六〇〇万エーカー）の一パーセント以下である。このふんだと、個人農園は集団農場にくらべて、（農地の単位面積あたり——引用者）ほぼ四〇倍の効率をあげている。また、一九七三年版ソビエト経済年鑑の作柄別生産高を見ても、共産主義の総本山（？）——引用者）のソビエトで、ジャガイモは六二パーセント、果物と野菜の三二パーセント、卵は四七パーセント以上、肉・牛乳は三四パーセントが、これら二五〇〇〇万の個人農園に支えられていることがわかる。」⁽¹⁹⁾

(19) 前出、『ロシア人』

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

私的労働にもとづく個人農園の経営は、建前としてはあくまでも副業経営であるが、ソ連農業の全生産額にしめる個人農園の比重が約三割近くをしめており、とくに、国民の日々の生活にかかせない重要な生鮮農産物の生産における比重がそれ以上をしめておくと、個人農園が、ソ連の農業生産と住民への食料供給において、まことに重大な役割を果していることが理解されるのである。そしてこの際、とくに、個人農園は独立した私的労働にもとづくものであり、その生産物は生産者個人の私的生産物であり、自由市場において真正銘の商品になるということに留意しておく必要があるだろう。

「ただ、自立的な、たがいに独立しておこなわれる私的労働の産物のみが、たがいに商品としてあい対する。」(『資本論』一卷二篇一章二節)と、徹底した商品分析にもとづく深い洞察の結果を、簡潔な珠玉の文章にまとめたのは、周知のようにマルクスであるが、たがいに独立していとなまれている私的生産者たちになった生産関係によって規定されることによつて、コルホーズ農民たちの私的農園の生産物は、必然的に商品という形態をとらざるをえないのである。

コルホーズ農民は自由市場で自分の商品を販売し、手に入れた貨幣で買物をする。りっぱに商品流通がおこなわれ、貨幣も流通している。こうしたことが、発達した社会主義社会であると称されている現代のソ連邦で、どうして問題外視することができない重大な規模と程度でおこなわれているのである。

ところが、フルシチョフ綱領によれば、とてもとても、こんなはずではなかったのである。

「コルホーズ制度の経済的繁栄は、コルホーズ的所有を全人民的所有へとしだいに接近させ、将来は単一の共産主義的所有に融合させるための条件をつくっている。」

「コルホーズとソフホーズの發展の經濟的基礎は、その生産力の不斷の向上とそのもっとも効果的な利用、生産組織と經營方法の改善、労働生産性のたえない向上、そしてりっぱな労働や優秀な成果にはより高い支払いを、という原則を厳守することである。これを基礎にして、コルホーズとソフホーズは、その生産関係、労働の性格、その労働者の福祉と文化の水準からみて、共產主義的な型の企業にますますちかづいていくだろう。

「コルホーズの經濟的向上の結果、コルホーズ内部の諸関係を改善することが可能になる。すなわち、生産の社会化の程度がたかまり、基準作業量のきめ方、労働組織、労働にたいする支払いが国营企業の水準と形態へちかづき、月間保障支払い制へ移行し、社会的サービス（公共給食、保育所、幼稚園、日常生活施設その他）がひろく發達するようになるだろう。

「コルホーズの共同經營は、一定の段階になると、コルホーズ員の必要を共同經營の生産物と収益によつて完全に見ることができるような發展水準にたつする。これを基礎にして個人的副業經營は、しだいに、經濟的に不用となるであろう。コルホーズの共同經營が、コルホーズ員の個人的副業經營に完全にとつてかわることができ、コルホーズ員自身が宅地付屬經營の不利を確信したとき、かれらは、自發的にそれと手をきるようになるだろう。」⁽²⁰⁾（傍点は引用者）

(20) 前出、『ソビエト連邦共產黨綱領』

前にみたように、フルシチョフ綱領が具体的な展望を示した期間は一九八〇年までの二〇年間であつた。そして、その二〇年間もすぎで一九八〇年以降のソ連邦では、黨綱領によれば、すでに共產主義の物質的・技術的基礎が創りだされ、全国民にはありあまるほどの物質的・精神的財貨が保障され、単一の全人民的所有への漸進的移行がおこな

ソ連邦に共產主義社会は建設されたか？

われ、基本的には共産主義社会が建設されているはずであった。そして、いままたみたところによれば、コルホーズ農民のあらゆる必要は——ソ連邦に共産主義社会が基本的に建設されている一九八〇年頃ともなれば——コルホーズ共同経営のありあまるほど豊富な生産物と収益によって完全に満たされるから、かくして、個人的副業経営などにはや不用となり、余計なものとなるから、コルホーズ農民は誰に言われなくとも、他から強制されずとも、自発的に個人農場経営などはおこなわないようになる筈であったのである。

ところがである。事態は、けっして、ソビエト連邦共産党・第三の綱領の約束したようにはならず、その約束した方向への進展すらみられず、なんと、むしろ逆の方向へと展開しているようなのである。

一九八一年二月のソ連共産党第二六回大会でのブレジネフ書記長報告のなかには、つぎのようなくだりがみられる。

「社会主義農業の基礎は、コルホーズとソフホーズであったし、これは今も変わらないが、しかし、だからといってそれは、個人による副業経営の可能性を軽視してもいいということの意味するものではない。経験が実証しているように、こうした経営は、食肉、ミルク、その他若干の種類の農産物生産におけるよき補助者でありうる。勤労者が持っている果樹園、菜園、家禽、家畜は、われわれの共通の富の一部である。」⁽²⁾

個人農園経営が、「食肉、ミルク、その他若干の種類の農産物生産におけるよき補助者でありうる」などと、たいへんひかえめに評価されているけれど、ソ連邦の人々にとって、その食生活のなかで主食につぐほどの重要な位置をしめるじゃがいもの生産の過半までもが個人農園によって支えられているという一事実をもってしても、個人農園は、それがなければ、現状程度の住民の食生活の維持にも重大な支障をあらたにつけ加えなければならないような重

大な役割を、現になつてゐるし、になわなければならないのである。だから、軽視してよいどころか、これに多大の期待をかけざるをえないのであらう。

ブレジネフ書記長は、つぎのようにつづける。

「ソ連共産党中央委員会は、個人、個人の副業経営、副業を發展、發展させる追加措置についての決定を採択すべきであるときみなした。この決定には、副業経営、副業、なかでもまず、家畜と家禽の飼育にたいする市民の関心を高めるような物質的精神的条件をつくることが予定されている。コルホーズ員、ソフホーズ勤務員が、幼畜、飼料を容易に入手できるようにしてやらなければならない。それは、自分で家畜を飼っている人と、コルホーズやソフホーズの家畜を自分の家で世話しようという人と、その両者について言える。一連の共和国や州でみられるこうした経験を広めていくべきである。

「工場、工場の副業経営、副業もまた、あらゆる方法で支持、支持さるべきである。」⁽²²⁾

(21・22) 前出、『ソ連共産党第二六回大会へのブレジネフ書記長の報告』

ごらんのように、いまのソ連邦では、住民に食料をとどこおりなく供給できるようにするために、個人の副業経営、個人農園経営を發展させる追加措置が必要であるとされているのである。しかし、本来のコルホーズ共同生産が期待したように伸びず、その打開策のひとつとして個人農園での副業経営の發展をはかるようでは、個人的副業経営が、しだいに、経済的に不用になるとか、また、単一の全人民的所有への漸進的移行がおこなわれるとかは、まさに夢のまた夢であらう。まして、工場の副業経営まで奨励されるようでは、事態はむしろ逆の方向にしかも、かなりの歩幅と速度でもつて進み、共産主義建設からはますます遠ざかりつつあるものと言わざるをえないのである。

では、コルホーズ市場で、良質の農畜産物を、国营商店でよりも高価に売っているコルホーズ農民の暮しむきはど

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

んな状態なのであろうか？ フルシチョフ綱領の約束するように、コルホーズ農民の必要が、共同経営の生産物と収益によって完全に満たされ、個人的副業経営は経済的に不用となるような状態になっているのであろうか？

ここでまた、ヘドリック・スミス記者の興味ある話に耳をかたむけてみよう。

「あるとき、アルメニアでこんなことがあった。集団農場の責任者が、『ワシントン・ポスト』のロバート・カイザー記者と私に、一般の戸外労働者は一年を通じて月平均三五〇〜四五〇ルーブルの所得があると語った。議長は他にも数字をあげたが、公表されているソビエトの平均値と余りにちがうため、私たちはメモをとるのをやめてしまった。それでも彼はいつまでも話しつづけるのだった。彼は家へ歩いて行く途中、ちょっと用事ができたようだった。

私は、このときとばかり、一人で抜け出して、農夫と一こと二こと話した。その農夫の話では、彼の収入は收穫期で一カ月一五〇ルーブル、農閑期にはそれより少ないという。個人農園がなければ、どうにもやっていけない、この農夫はつけ加えた。しかし、具体的な問題に入らないうちに責任者があたふたとやってきて、会話を割って入り、以後、彼の家に入るまでピタリと私について離れなかった。⁽²³⁾」(傍点は引用者)

「ソビエト政権下では、個人農園のおかげで、かろうじて貧困からまぬがれるだけの糧を得ることができた。しかし、それだけでは都会と田舎の間の生活水準の大きな較差を埋めることはできない。多くの農家にとって、個人農園をもつことは、最低限の生活か、それともある程度ましな生活ができるかの違いを意味するだけだ。

「作物を売ったあと、農民たちはどこへ足を向けるか。彼らのあとをつければ、農民たちはモスクワの商店街に直行し、小さくて汚い村の店では手に入らないものを買っている。⁽²⁴⁾」

「最近では以前よりずっとよくなっているものの、ソビエトの農民は、依然、二級市民の地位にある。なによりも

農民自身がそう感じてゐる証拠に、農村から都市部への大規模な人口移動（一九五九年から七〇年にかけて二一〇万人）があげられる。ピクトル・ペレベデンツェフほどの立派な人口学者は、ときどき、『農村の日常生活の極端な遅れ』を率直に認めている。⁽²⁵⁾

（23・24・25） 前出、『ロシア人』

フルシチョフ綱領の期待と見通しと計画に反し、コルホーズ農民は、依然として、共同経営の生産物と収益のみによつては暮しをささえることができず、個人農園がなければどうにもやっていけない状態のようである。個人農園の作物をコルホーズ市場で愛想よく販売する農民の姿は、なんとか暮しをたてるための、生きるため真剣な姿なのである。

また個人農園は——さきにもみたように——ソ連における農業総生産高の三割にもおよぼうとするほどの生産高をあげており、個人農園経営なしには、それでも不足がちな現在の住民への食料供給を、なんとか維持していくこともむづかしくなるだろうほどの重大な役割をはたしている。

そしていま、個人的副業経営は、住民たちに「食料供給を間断なくおこなう課題」をはたすために、「経済的に不用となる」どころか反対に、これを発展させねばならないとされているのである。

もちろん、個人農園といわれる私的経営は商品生産が残存し、消えさつていくのではなく、発展させられていくならば、商品生産、商品経済もますます隆盛にむかうだろうし、私的利益、利潤をめざした商品生産は、一定の条件さえそろえば、容易に、公然たる、あるいはかくれた資本主義経済の発展へと進まざるをえないであろう。

ともかく、社会主義とは階級をなくすこと⁽²⁶⁾でもあるわけだが、現在のソ連邦のように、労働者のほかに農民も存在

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？

八〇

しているあいだは、共産主義社会はおろか社会主義社会も実現されてはいないといわなければならないのである。⁽²⁷⁾

(26) レーニン「プロレタリアートの独裁の時期における経済と政治」、第四版『レーニン全集』三〇巻九二頁。

(27) レーニン「労組組合第三回全ロシア大会での演説」、第四版『レーニン全集』三〇巻四七二頁。

(未完)

(一九八二・一〇・二)